

実践報告

コミュニティ・スクールの可能性： 導入効果の検証と具体的実践を通して

宝本 将

愛媛大学大学院生 takaramoto42195@yahoo.ne.jp

要約：愛媛県A市では、4年間をかけてコミュニティ・スクール（以下CS）が全市立小・中学校に導入された。本研究では、教職員と生徒の意識調査を行い、その導入効果を導入期間による差と、1年間の変化の2つの視点から検証した。検証の結果、業務改善（地域コーディネーターの活用）、CSに対する理解の深化、広い意味での学力向上、生徒の愛郷心の醸成などの効果が見られた。その検証結果を踏まえ「CSと働き方改革」「CSとカリキュラム・マネジメント」「生徒主体の地域連携」「つながりが生む効果」という4つの視点から、具体的実践を通して、今後あるべきCSの姿を提案する。CSは地域ともにある学校づくりに欠かせない仕組みである。導入したばかりで手探り状態の学校現場ではあるが、本研究が今後のCSとしての学校経営の一助になれば幸いである。

キーワード

コミュニティ・スクール
業務改善
地域コーディネーター
カリキュラム・マネジメント
愛郷心

1. 研究の目的

新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、地域と学校の連携・協働体制の構築が進んでいる。その中で大きな役割を期待されているのがコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度、以下CS）である。

設置が努力義務化（地方教育行政の組織及び運営に関する法律第四十七条の五.H29.4）されたこともあり、CSの設置は全国的に大きく進んでいる。しかしながら、その効果の検証は十分になされているとは言い難く、システムの導入を先行させたために活動が形骸化しているという課題も指摘されている。

上記のような背景から、本研究の目的は、A市（全小・中学校でCSが導入）において、CS導入の成果や課題を検証し、勤務校における具体的実践を通して、CSがもたらす教育効果やそのあるべき姿を見いだそうとするものである。

2. 研究の方法

(1) 教職員意識調査

A市におけるCS導入の成果や課題を検証するために全教職員対象に意識調査を行った。意識調査は33問（地域連携・協働意識、情報・目標の共有、組織・理解、カリマネ、学力向上、多忙感解消・業務改善の6カテゴリーに分類）で構成し、「4とてもよくはてはまる～1全くあてはまらない」の4件法で実施した。

調査結果を、次の2つの視点から分析し、CS導入の効果を検証した。

1つ目の視点は、1回目調査（R1.6）と3回目調査（R2.8）の比較による1年間の数値の変化からの分析である。

2 つ目の視点は、教職員をCS 導入時期によりA 群 (H29.4 導入)、B 群 (H31.4 導入)、C 群 (R 2 .4) の3 グループに分けてのCS 導入期間による差からの分析である。

1 回目 (R 1 .6) n =428 2 回目 (R 1 .11) n =146 (抽出) 3 回目 (R 2 .8) n =423
 属性：校長8 %，教頭7 %，主幹教諭1 %，教諭71%，養護教諭6 %，講師その他7 %

(2) 生徒意識調査

CS がもたらす生徒への効果を明らかにするために、抽出した3 中学校の3 年生を対象に意識調査を行った。質問項目は全国学力・学習状況調査の質問紙調査から11 問を抜粋して実施した。1 回目調査 (R 1 .4) と2 回目調査 (R 1 .4) の比較から分かる同一集団の変化と、1 回目調査 (R 1 .4) と3 回目調査 (R 2 .5) の比較から分かる異集団・同一時期での変化の2 つの視点から分析を行った。

1 回目 (H31.4) n =280 2 回目 (R 1 .12) n =270 3 回目 (R 2 .5) n =244

3 . CS 導入効果の検証

(1) 教職員意識調査結果及び分析

1) 1 年間の変化から見る CS 導入の効果

右の表1 は、各カテゴリーの平均値の比較である。すべてのカテゴリーで、数値が伸びており、全体的に見て、CS 導入による効果を教職員が感じていることが分かる。

では、具体的にどのような内容で効果が見られたのか、平均値の差の大きかった上位10 項目を、差の大きかった順に並べ、効果量を求めたのが表2 である。

まず、質問32「外部との連絡や調整の負担や多忙感が減っていると感じるか」と質問39「コミュニティ・スクールは業務改善につながるか」に注目したい。CS がもたらす業務改善の効果を教職員が感じていることが分かる。

表1 教職員意識調査概要 (カテゴリー別)

カテゴリー	R1.6 (n=428)	R2.8 (n=423)
地域連携・協働意識	3.16	3.21
情報・目標の共有	2.98	3.05
組織・理解	2.88	3.06
カリマネ	2.52	2.59
学力向上	2.80	2.92
多忙感解消・業務改善	2.49	2.67

表2 平均値の差の大きかった上位10 問とその効果量

質問番号	質問内容	R1.6 (n=428)		R2.8 (n=423)		平均値の差 ** : p<0.01	効果量	カテゴリー
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
質問32	あなたは、外部との連絡や調整の負担や多忙感が減っていると感じますか。	2.12	0.67	2.47	0.79	0.35 **	0.48	多忙感・業務改善
質問39	あなたは、コミュニティ・スクールは業務改善につながると思いますか。	2.52	0.74	2.87	0.73	0.35 **	0.48	多忙感・業務改善
質問11	あなたは、コミュニティ・スクールについて理解できていますか。	2.79	0.60	3.09	0.57	0.30 **	0.51	組織・理解
質問13	あなたは、今までにコミュニティ・スクールに関する研修 (校内研修含む) の機会がありましたか。	2.83	0.77	3.07	0.65	0.24 **	0.34	組織・理解
質問31	あなたは、コミュニティ・スクールは学力向上につながると感じますか。	2.73	0.65	2.96	0.61	0.23 **	0.37	学力向上
質問34	あなたは、公務時間外の諸会議への参加での負担や多忙感が減っていると感じますか。	2.00	0.69	2.20	0.72	0.20 **	0.28	カリマネ
質問27	あなたは (学校) は、授業の補助や補充学習に、地域 (の人材) を活用していますか。	2.42	0.81	2.62	0.88	0.20 **	0.24	多忙感・業務改善
質問12	保護者・地域は、コミュニティ・スクールについて理解できていると思いますか。	2.29	0.56	2.48	0.58	0.19 **	0.33	組織・理解
質問15	保護者・地域は、学校運営協議会で話し合われた内容を知っていると思いますか。	2.37	0.65	2.54	0.61	0.17 **	0.27	組織・理解
質問20	学校は、参観日などで教育活動を積極的に公開していると思いますか。	3.35	0.53	3.18	0.58	-0.17 **	-0.31	情報・目標の共有

次に、質問 11, 13, 12, 15 などの伸びからCS という仕組みの理解が学校・保護者・地域ともに進んでいることが分かる。仕組みの理解が不十分では、効果的な運用も期待できない。CS を導入することで、理解も進んでいると言える。逆に言うと「食わず嫌い」で導入しなければ、理解も進みにくいと言えるかもしれない。

3 点目に、質問 31, 27 の学力向上、カリマネカテゴリーの質問でも効果が見て取れる。CS が導入されることで、地域人材の活用が進み、学びの質が高まったと考えられる。

2) CS 導入期間から見る CS 導入の効果

続いて、CS 導入期間による差を見てみる。下の図1 と図2 は、CS 4 年目のA 群, 2 年目のB 群, 今年度から導入のC 群の各カテゴリーの平均値を表したものである。

CS 導入が進み、活動が軌道に乗っていくほど、どのカテゴリーでも数値が上がっていることが分かる。CS の効果は一朝一夕で現れるものではなく、長い期間をかけて学校と地域との信頼関係を積み重ねていくことが必要不可欠である。

また、昨年度と今年度を比べると、コロナ禍の影響で、活動がほとんどできていないC 群と、コロナ禍の中でもCS の仕組みが出来上がっていたA 群の差がより広がっていることが分かる。このことは、信頼に支えられたCS の仕組みは、予測できない事態にも柔軟に対応できる学校づくりにつながるものであることを示唆している。

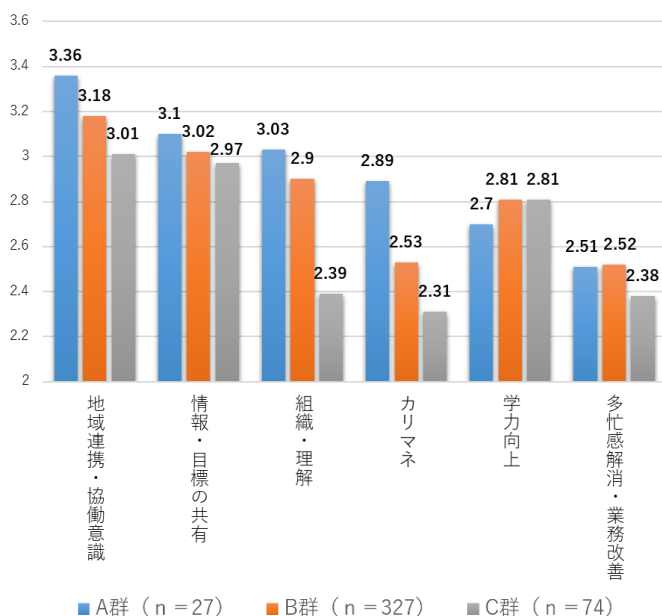


図1 CS 導入期間別 各カテゴリーの平均値 (R1.6)

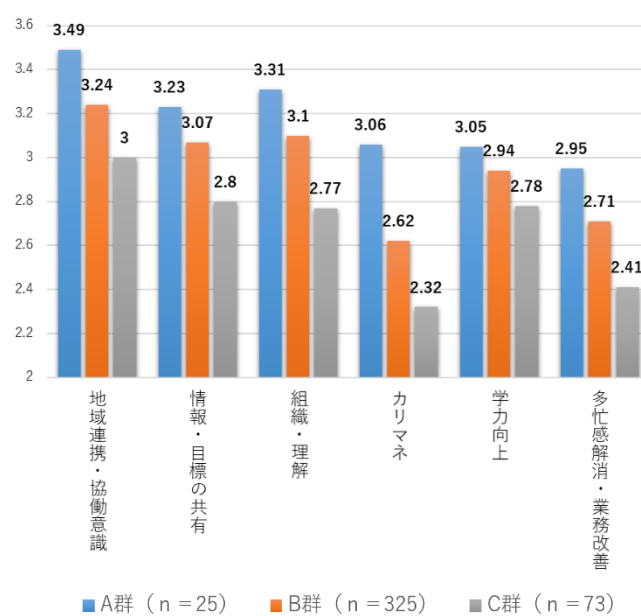


図2 CS 導入期間別 各カテゴリーの平均値 (R2.8)

次の表3 は、CS 導入期間による差の大きい質問項目を差の大きい順に上位8 項目を表したものである。質問 27「地域人材の活用」や質問 21「地域・保護者の協力」、質問 26「地域貢献の活動」などで大きな差が見られる。CS を導入することで地域学校協働活動も進み、地域との「つながり」を生かした教育活動が増加していることが分かる。また、質問 33「保護者対応の負担感軽減」にも注目したい。CS 導入で、地域・保護者とのつながりが強まり、信頼関係が築かれ、その結果として保護者対応の負担感も減っていると考えられる。

表3 CS 導入期間による差の大きい質問 上位8 項目

質問番号	質問内容	各群の平均値			各群間の差			全体 (n=423)	
		A群 (n=25)	B群 (n=325)	C群 (n=73)	A群と C群	A群と B群	B群と C群	平均値	標準偏差
質問27	あなたは(学校)は、授業の補助や補充学習に、地域(の人材)を活用していますか	3.32	2.66	2.21	1.11	0.66	0.45	2.62	0.88
質問33	あなたは、保護者対応(クレーム対応)の負担や多忙感が減っていると感じますか	2.80	2.22	1.90	0.90	0.58	0.32	2.20	0.75
質問21	保護者や地域の方は、学校行事やPTA活動などに協力的ですか	3.76	3.38	2.96	0.80	0.38	0.42	3.33	0.56
質問26	あなたは、地域に貢献・還元する授業や教育活動を実施しましたか	2.92	2.43	2.18	0.74	0.49	0.25	2.42	0.77
質問12	保護者・地域は、コミュニティ・スクールについて理解できていると思いますか	2.92	2.51	2.19	0.73	0.41	0.32	2.48	0.58
質問36	勤務校は、管理職のリーダーシップのもと、学校運営協議会の組織的な運営がされていますか	3.64	3.42	2.92	0.72	0.22	0.50	3.34	0.65
質問37	勤務校は、教職員同士での連携・協働の意識が高いですか	3.52	3.39	2.84	0.68	0.13	0.55	3.30	0.65
質問17	学校(あなた)は、児童生徒の諸活動を地域に対して、積極的に紹介していますか。(たより・HP等)	3.32	3.15	2.68	0.64	0.17	0.47	3.08	0.75

(2) 生徒意識調査調査結果及び分析

下の表4は、生徒意識調査の結果である。1回目と2回目の比較で、同一集団の変化、1回目と3回目の調査の比較で、異なる集団の同時期での変化が見て取れる。数値は「当てはまる」もしくは「どちらからといえば当てはまる」と答えた割合(肯定率)である。

表4 生徒意識調査の結果

質問番号	質問内容	肯定率			肯定率の変化	
		1回目 H31.4 (n=280)	2回目 R1.12 (n=270)	3回目 R2.5 (n=244)	1回目 ↓ 2回目	1回目 ↓ 3回目
質問1	自分には良いところがあると思いますか。	70.7	75.5	80.4	4.8	9.7
質問2	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。	77.8	86.3	90.5	8.5	12.7
質問3	将来の夢や目標を持っていますか。	76.9	74.7	71.3	-2.2	-5.6
質問4	ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか。	93.2	94.8	95.5	1.6	2.3
質問5	難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか。	67.2	83.6	77.9	16.4	10.7
質問6	学校の規則を守っていますか。	93.9	96.3	95.5	2.4	1.6
質問7	人が困っているときは、進んで助けていますか。	90.3	94.1	88.6	3.8	-1.7
質問8	人の役に立つ人間になりたいと思いますか。	94.9	93	93.5	-1.9	-1.4
質問9	今住んでいる地域の行事に参加していますか。	61.4	71.6	61.1	10.2	-0.3
質問10	地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか。	46.8	72.1	63.1	25.3	16.3
質問11	日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか。	68.8	76.9	69.1	8.1	0.3
質問12	生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。	68.2	81.8	73.6	13.6	5.4
質問13	授業で学んだことを、ほかの学習に生かしていますか。	73.3	81.9	79.4	8.6	6.1
質問14	総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか。	64.2	81	70.5	16.8	6.3
質問15	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。	71.6	81.1	74.2	9.5	2.6

双方の比較ともに向上している項目が多いが、中でも注目は質問 10「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあるか」である。「愛郷心」とも言えるこの項目の伸びはCS の大きな効果、成果といえる。また、質問5「挑戦意欲」や質問1「自己肯定感」などが伸びていることも、地域とのつながりが生み出した効果の1つと言える。

4. 具体的実践とCS の可能性

(1) CS と働き方改革

表2にあるように、教職員意識調査で、質問 39「CS は業務改善につながるか」の平均値が 0.35 伸びている。そして、業務改善の具体的な内容として意識調査で現れてきているのが、下の図3 で示されている質問 32「外部との連絡や調整の負担の軽減」である。R1 年度とR2 年度では、約2 倍の教職員が肯定的な回答をしている。「CS になることで外部との連絡や調整の手間が増える」という一部の声も聞こえる中でこの結果の原因の1 つとして、A 市において大きな役割を果たしているのが「地域コーディネーター」の存在、活躍である。

右下の図4 の下のグラフは、R2 年度調査で質問 32 を肯定的に回答した教職員、否定的に回答した教職員に分け、そのそれぞれが質問 40「地域コーディネーター配置により、地域連携に関する取組が円滑に進んだか」について、どう回答したかを示すものである。質問 32 に肯定的な回答をしている教職員は、質問 40 の肯定率 97% という結果である。この結果からA 市において、CS 導入に合わせて、各校に配置された地域コーディネーターが、その名前のおり「地域と学校をつなぐ」という部分でしっかり機能していることが分かる。

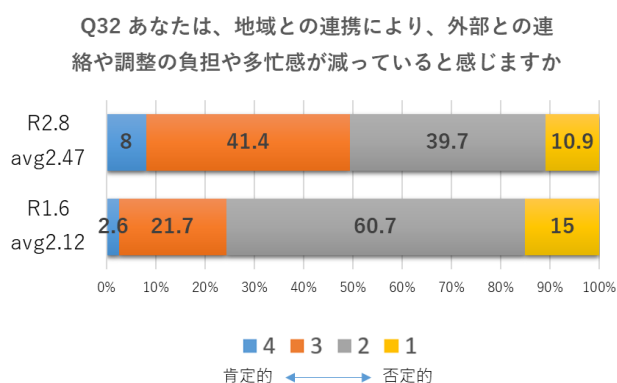


図3 質問 32 の回答結果

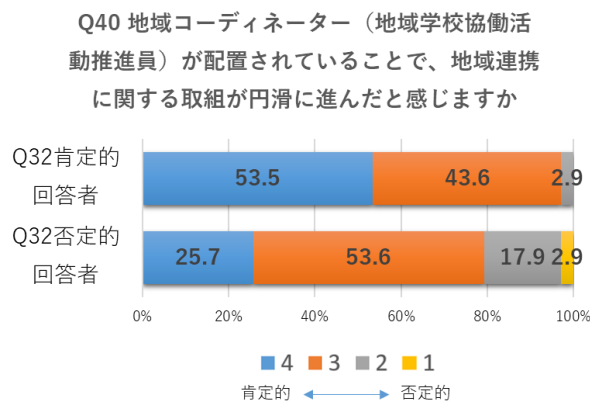


図4 質問 40 の質問 32 回答傾向別結果

次に、質問 40「地域コーディネーターの効果」をx 軸に、質問 39「CS が業務改善につながるか」をy 軸に学校ごとの平均値をプロットしたものが図5 である。両者には相関があり ($r = 0.68$)、特に職場体験学習などの活躍の場が明確になりつつある中学校での効果が大きいことが分かる。しかしながら、点の散らばりは大きく、各校ごとの差が大きいのが現状である。地域コーディネーターをいかに有効に使えるか、学校のマネジメント力も問われている。下記の自由記述に見られるような課題を感じている教職員もおり、地域コーディネーターに関しては、勤務時間や待遇面など行政面での課題も散見されることを付け加えておく。

- 地域コーディネーター設置は不可欠であるが、配当時間が限られているため、地域連携をさらに充実させようとすると教員に負担がかかることになる。(勤務時間の確保が必要である。)
- 地域コーディネーターとなりうる人材の確保（選定）、及び育成
- 地域コーディネーター等がどこまで学校の教育活動に関して、共通理解や内容理解などをしていくか。職員ではないので、職員会に参加することはないが、内容が分かっていないと地域につなぐことが難しいのではないか。学校サイドの発案になるとかえって学校の負担が増える。
- 地域コーディネーターの待遇面の改善が必要である。(給与等)

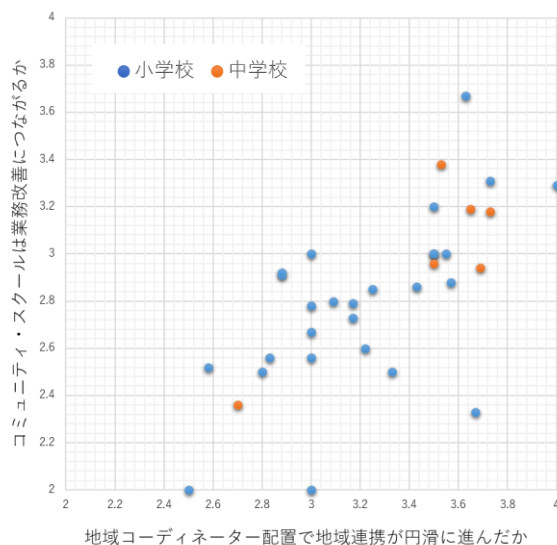


図5 質問 39 と質問 40 の相関図

しかしながら、地域コーディネーターの働きで、先生方の負担感が減っていることは間違いが無く、CS がもたらす働き方改革の1 つであると言える。実践例として、勤務校における地域コーディネーターの活動を以下に挙げる。

まず、地域住民が講師を務める放課後自主学習の運営 (図6 左) である。コーディネーターが講師の日程調整をはじめ、運営全般を行っている。続いて、支援ボランティアの確保、依頼業務である。図6 中は、生徒の奉仕活動に合わせてコーディネーターが声を掛けた地域ボランティアが通学路の草刈りをしている様子である。

最後に、地域・保護者への広報・啓発活動である。本校では地域の回覧版という形で、「学校運営協議会だより」(図6 右) をコーディネーターが作成、配布している。

コーディネーターが効果的に働ける第一歩は「ビジョンの共有」である。勤務校ではコーディネーターの机も職員室にあり、常時教職員と意見交換をすることができる。チーム学校の一員として、コーディネーターが働きやすい環境を作っていくことで、コーディネーターも本来の創造的な仕事が可能となる。



図6 地域コーディネーターの活動例

(2) CS とカリキュラム・マネジメント

表2 にあるように教職員意識調査で、質問 31 「CS は学力向上につながるか」という質問で平均値が 0.23 伸びている。ここでは、テストの点数という狭い意味での学力だけではなく、地域の力によって学びの質が高まるといった広い意味でのとらえ方が必要である。そして、その結果につながった要因として図7 で表される質問 27 「地

域人材の活用」が考えられる。肯定率が 15%ほど伸びており、授業や補充学習での地域人材の活用が進んでいることが分かる。

しかし、少し違う視点からこの質問 27 を見てみると課題が見えてくる。R 2 .8 調査の平均値は 2.62 であるが、標準偏差が 0.88 (表2) と散らばりが大きい。また、図8 は各校ごとの平均値の度数分布の様子である。これらから学校間の差が大きいことが分かる。

その差を生み出しているものが「カリキュラム・マネジメント」の差であるとする。思いつきのような協力依頼ではなく、地域と学校でビジョンを共有した上で、計画を練り合い、絶えず省察を加えながら地域連携が実施できているか、ということが大切である。

CS 4 年目となる勤務校であるが、地域連携活動を行おうとするあまり、地域連携活動を「やること」自体が目的となってしまう、突発的な企画や、勤務時間外の活動などの回数も増え、教職員の負担感も高まるという弊害が見られた。そこで今年度は、総合的な学習の時間を地域連携の効果的な場面ととらえ、全体計画の再構成を行った。右下の図9 は一部を抜粋したものである。3 年間の学びのつながりも意識し、テーマを1 年「地域を知る」2 年「地域に学ぶ」3 年「地域の未来」と設定した。身に付けるべき資質・能力に立ち返り、ねらいを明確にした上で、必要な地域連携活動を教育課程内に配置するようにした。それを教職員や学校運営協議会で共有し、コーディネーターを活用しながら実践につなげている。なお、学校運営協議会の委員も、学校の活動とつながりを考慮して人選している。

例えば、1 年生は、地域を知るということで、基礎講座として「ふるさと探訪」と名付けた町内巡りを行った。運営協議会の委員も務める地域の方と一緒に企画し、講師の調整や資料作成など協力して行った。活動後には、評価と省察を行い、よりねらいに迫っていく教育活動につなげていくことを目指した。「カリキュラム・マネジメント」を行う上で、このサイクルをつくるのが欠かせない視点である。

Q27 あなたは(学校)は、授業の補助や補充学習に、地域(の人材)を活用していますか **

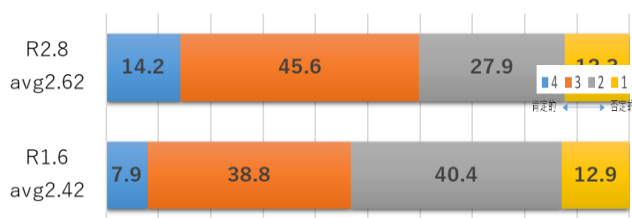
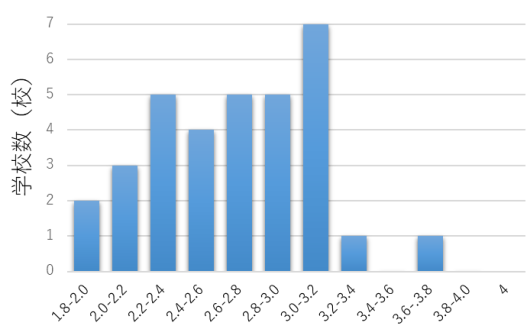


図7 質問 27 の回答結果



Q27平均値

図8 質問 27 平均値 学校数の分布

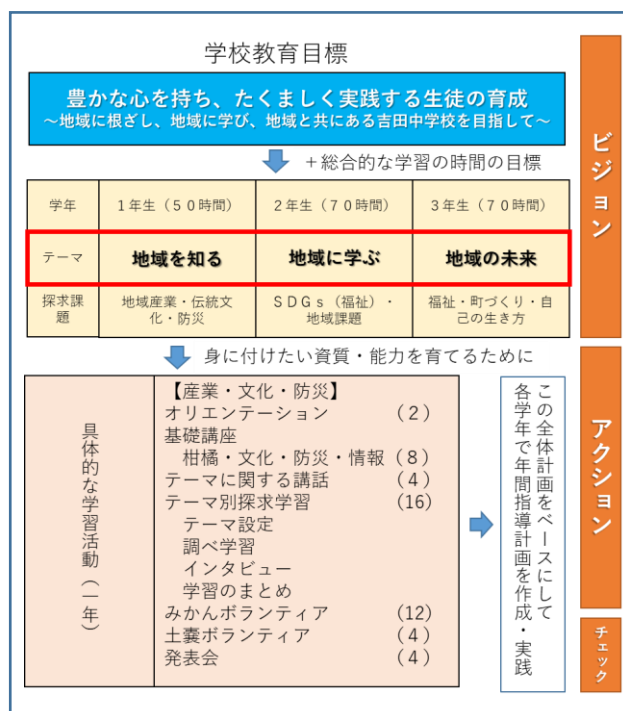


図9 総合的な学習の時間「全体企画」(抜粋)

(3) 生徒主体の地域連携

3 つ目に「生徒主体の地域連携」という視点である。これから生徒の成長につながるCS としていくためには、この視点がとても重要である。右の図 10 は、中学3 年生に聞いた「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」という質問の結果である。「愛郷心」と表現をするが、同一集団で約 25%、異集団の同時期調査で約 16% 上昇している。この伸びはCS の大きな効果と言える。

その効果を考える際に重要な要素が質問 26「地域に貢献する活動を実施したか」である。しかしながら、図 11 の結果だけを見ると、この1 年間で大きな変化は見られない。そこで、この質問を中学校教職員だけで示してみると図 12 のようになる。

「当てはまらない」が増えているのはコロナ禍の影響が大きいと思われるが、「当てはまる」と回答した教職員は倍増、肯定率は約9 % 増加している。このように地域貢献活動の増加もCS 導入の効果といえる。CS となり、地域学校協働活動を進めていく上では、地域と学校が相互の利点を見いだせる関係となることが大切である。特に中学校段階では、生徒が主体となり、地域に関わり、貢献していく地域連携を行っていくことが求められる。

質問10 地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか
(生徒調査：数値は肯定率)

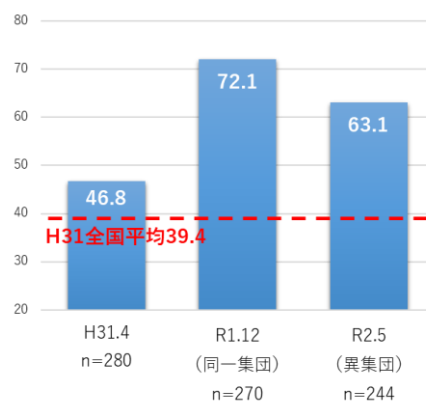


図 10 質問 10 の回答結果

Q26 あなたは、地域に貢献・還元する授業や教育活動を実施しましたか

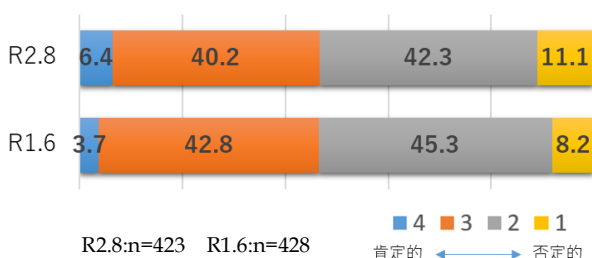


図 11 質問 26 の回答結果 (全体)

Q26 あなたは、地域に貢献・還元する授業や教育活動を実施しましたか (中学校)

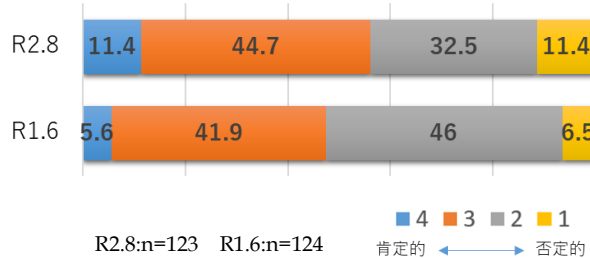


図 12 質問 26 の回答結果 (中学校)

勤務校では、これまでのCS としての活動の成果もあり、先ほどの質問 10「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」に、全校で 73.7% もの生徒が肯定的に答えている。その思いを出発点として、生徒総会での議題を「地域と共にあるA 中を目指して」に設定し、自分たちに何が出来るか、生徒たちが議論を行った。出された意見は「町をきれいにする」という清掃活動の案と、「行事で笑顔を届けたい」という案であった。

(図 13) そして、生徒総会で出された案を、生徒自らが学校運営協議会の場で提案し、委員の方と一緒に熟議を行い、提案内容の具現化を図った。(図 14)

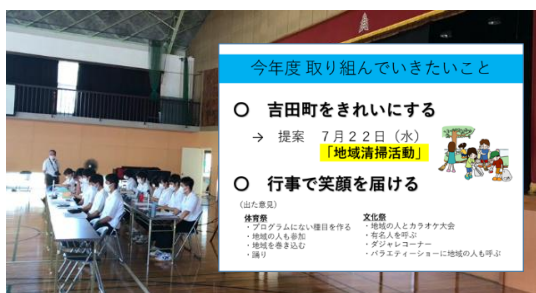


図 13 生徒総会



図 14 学校運営協議会での生徒提案と熟議

結果として、実現したのが下の図 15 の「吉中クリーン隊」の取組である。地域にちらしを配り、清掃活動や手伝いなどを行った。できることは限られていたが、地域の方と交流しながら活動し、感謝の言葉をもらった生徒たちは、役に立てたという満足感を感じていた。

図 16 は、その一連の活動に関わった運営協議会委員の公民館主事からいただいた感想である。CS という仕組みは、学校と地域のつながりを強める仕組みである。そのつながりの真ん中に生徒がいることで、委員の方もより本気に、主体的に関われるようになる。支援してもらえばかりの地域連携でなく、「児童や生徒が地域にどう関わるのか」、そこを意識して、CS 運営を進めていかなければならない。そして、そのような生徒主体のCS によって「地域づくりの核」としての学校が実現する。



図 15 クリーン隊の取組

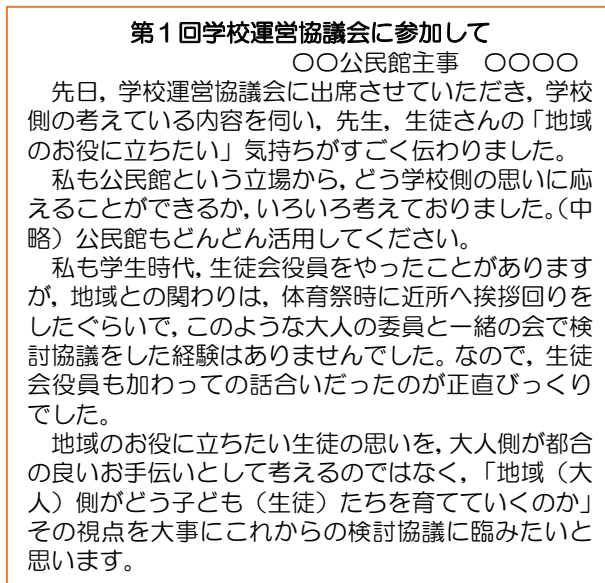


図 16 公民館主事からの手紙

(4) 「つながり」が生む効果

最後に、地域との「つながり」が生む効果について考察する。図 17～19 は生徒への質問のうちの特徴的な3問の結果である。注目したいのは、質問1 (図 17)「自分には良いところがあると思いますか」、いわゆる自己肯定感の伸びである。もう一つは質問5 (図 18)「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか」という挑戦意欲の伸びである。CS となり、地域の大人との関わりが増え、褒められたり、背中を押されたりする経験が増えたことがこの結果に影響していると考えられる。直接的な因果関係の証明は難しいが、CS の二次的な効果であると考えられる。

また、質問3 (図 19)「将来の夢や目標を持っていますか」の減少にも注目したい。災害やコロナ禍により、大人や地域が、未来に明るい展望を持っていない姿を生徒に見せていなかったらどうか。「つながる」ということは、マイナスの部分も生徒に影響することを忘れずにいなければならない。

CS の成功、つまり生徒の成長につながるCS の実現には、明るい未来を語れる大人、地域の存在が必要不可欠である。そのような大人や地域との「つながり」によって、生徒は大きく成長する。そのような大人、地域、そしてそれを生かせるCS を目指したいと思う。

質問1 自分には良いところがあると
思いますか

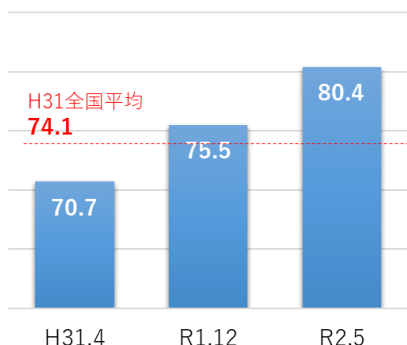


図 17 質問1 の回答 (肯定率)

質問5 難しいことでも、失敗を
恐れないで挑戦していますか

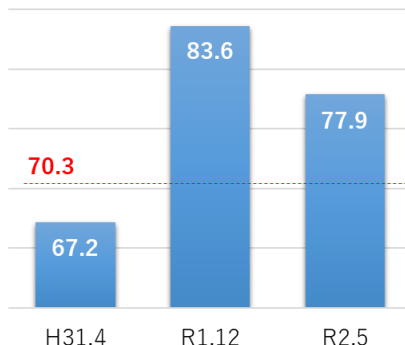


図 18 質問5 の回答 (肯定率)

質問3 将来の夢や目標を持って
いますか

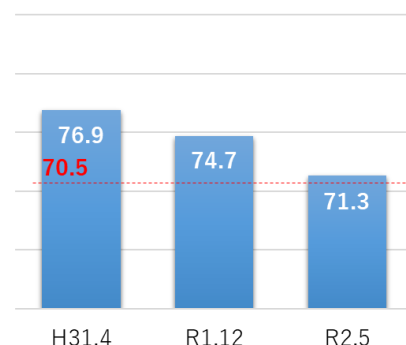


図 19 質問3 の回答 (肯定率)

5. まとめ

CS 導入により見られた効果と、今後のCS 運営に向けて目指すべき姿、克服すべき課題をまとめて、結びとしたい。

まず、CS 導入は業務改善面の効果が認められる。鍵となるのは「地域コーディネーター」の存在である。学校には地域と学校をつなぐコーディネーターが機能する組織作りが求められる。また、同時に条件面など行政からのサポートも必要である。

次に、CS 導入により、地域とのつながりを生かした教育活動や地域学校協働活動が進んでおり、導入の効果と言える。ただし、その運用に当たっては、地域といかにつながっていくかビジョンを描けていることが大切である。地域を巻き込んだカリキュラム・マネジメントを進める必要がある。

そして、生徒の「愛郷心」が育っている。CS 導入の大きな効果である。その思いを生かし、特に中学校段階においては、地域からの支援活動にとどまらず、生徒が主体となり地域と関わっていくことが大切である。生徒を真ん中に据えたCS であることが、大人や地域を変え、最終的に生徒の成長につながる。

CS 導入で、地域の大人と積極的に「つながる」ことで、生徒の学びが広がり、その経験が自己肯定感や挑戦意欲の向上につながっている。そこには生徒を育む地域、大人の存在が必要不可欠である。生徒たちにとって、魅力的な大人、誇れる地域でありたい。

謝辞

本研究に御協力いただいた関係諸機関の皆様にご礼申し上げます。また、本研究の実施を承諾いただいたA市教育委員会をはじめ、調査・研究に御協力いただいたA市の先生方に感謝申し上げます。

参考文献

- 貝ノ瀬滋 (2010) .小・中一貫コミュニティ・スクールのつくりかた 株式会社ポプラ社
- 木村直人 (2019) .未来の学校づくり 学事出版株式会社
- 小西哲也・當山清実 (2018) .「コミュニティ・スクールにおける学校支援のあり方に関する一考察」兵庫教育大学研究紀要 第52巻 101-106
- 佐藤春雄 (2016) .コミュニティ・スクール エイデル研究所
- 志水宏吉・若槻健 (2017) .「つながり」を生かした学校づくり 東洋館出版社

露口健司 (2015) .学力向上と信頼構築 ぎょうせい

露口健司 (2016) .「つながり」を深め子どもの成長を促す教育学 ミネルヴァ書房

露口健司 (2019) .ソーシャルキャピタルで解く教育問題 ジダイ社

中室牧子・津川友介 (2017) .「原因と結果」の経済学 ダイヤモンド社

長友義彦・静屋智・池田廣司・前原隆志 (2018) .「コミュニティ・スクールの効果と課題」山口大学教育学部附属教育実践
総合センター研究紀要第46号 127-136

前川浩一・青木一 (2019) .コミュニティ・スクールを持続可能にする地域コーディネーターのキックオフ 三恵社

広瀬省吾 (2019) .「コミュニティ・スクール設置準備期の研究」福岡教育大学大学院教職実践専攻年報第9号 281-288